

コロナ禍のもと、障害・福祉・人権を考える映画と講演の場で、交流が広がる!!

『つながる・つなげるシネマフェスティバル 2020』レポート

北風の吹き始めた12月1日は、国際エイズ Day。この日から御茶ノ水駅の近くのギャラリー884（本郷3丁目）で、『つながる・つなげるシネマフェスティバル 2020』が開催されました。

初日の1本目はイタリアの劇映画「トスカーナの幸せレシピ」（92分）、自閉症の青年たちの就労訓練の場で、社会奉仕活動を命じられたチョイ悪な料理人オヤジが教えることに…。そこのメンバーの青年が天才的な味覚を持ち若手シェフ・コンテストに挑戦することになり、このペアが大奮闘する物語で、施設長の女性、料理人の師匠の名シェフも絡んで、愉快で心温まるドラマが展開されるもの。

2本目はインド発の記録映画「薬は誰のもの？」（84分）、アフリカなど世界各地で広がったエイズ感染症に対する特効薬が開発されたものの、大手の製薬会社の利益本位の方針とこれに味方する各国政府の姿勢のもとで、多くの国で薬が極めて高価ゆえ入手できず命を落としていく状況が伝えられていく。これに対して自らもエイズに感染しながら、薬を安く広く普及できるように国際的な運動を進め、世論を拡大させていく人々の姿を伝えていく感動的でした。

この日は、二十名近くの来場者があり、イタリアのコミカル・タッチな作品を楽しむとともに、中村尚子さん（NPO 法人発達保障研究センター常務理事）の講演により、自閉症スペクトラムという障害について学ぶことができ、日本でも近年、関心が広がる発達障害について、その特徴と対応について知ることができました。また、障害者を描く映画の数々で幅広い人に理解のきっかけが生まれていることが語られました。記録映画では、まさに今、世界中がコロナ禍の危機に直面する中で、ワクチン問題に関心が集まる時期、感染症と特効薬の問題について貴重な見識を知ることができました。

2日目（水曜日）は車椅子バスケットの青春群像を描く劇映画「ウィニング・パス」（108分）で、今は有名となった松山ケンイチの主演第1作ということもあり、観客も十数名。バイク転倒などの事故で車椅子の身となった人々がパラ・スポーツに挑戦し、生き甲斐を見つけるテンポの軽快なスポーツ・ヒューマン・ドラマを楽しみました。2本目は長編アニメ「どんぐりの家」（110分）で、ろう重複障害の子どもを育てる家族の苦闘と希望の物語。障害をもつ子どもを抱える親や兄弟の葛藤、そこから生命の尊さを見出ししていく実話に基づく物語は、現在にも共通する問題提起となっています。

3日目（木曜日）は国際障害者 Day、冬の小雨の肌寒い天気。1本目は精神障害者の社会復帰の取り組みを描く劇映画「ふるさとをください」（94分）で、和歌山の「麦の郷」をモデルに、その施設を借りて撮影され、そこで働く障害当事者も出演し、ジェームス三木さんの軽妙な脚本と達者な俳優さんの魅力で、精神障害の持つ難しさを織り込みながら、長い入院生活から抜け出して、自立した社会生活と就労への取り組みが描かれており、まさに現在の課題であることが痛感されました。

2本目は、聴覚障害者の苦闘の人生の歩みを描く劇映画「ゆずり葉」（103分）で、この作品は全日本ろうあ連盟の60周年記念で製作されたもの。聴覚障害者である早瀬憲太郎さんが初めての脚本・監督を務め、プロの映画スタッフの参加も得て、障害当事者はすべてろう者という日本で初めての本格的な劇映画。谷中あたりの下町を舞台に「聞こえない」ことがもたらす社会的な壁を描き、ろう者の苦しさと共に、障害者同士の連帯を描いた力作に、来場者は感銘を受けました。

4日目（金曜日）の昼過ぎからは台湾の記録映画2本立て。先天性の遺伝子による手足や言語の障害を持つ女子高生が通う障害児学級の担任教員が自ら監督した「微笑大使」（45分）は、家族や級友に支えられて頑張る主人公の笑顔が魅力的。「夜明け」（50分）では、幼少時の火事の一酸化炭素中毒で耳以外の機能に大きな障害が残った女性が、母親と二人三脚で自らの思いを詩という形で発信しながら社会的な活動を続ける姿は驚きと感動を拡げていました。

5日の土曜日には、百年前に「私宅監置」という精神医療の「闇」に光を当てた精神科医の呉秀三東大教授の実践と研究調査の足跡を描く記録映画「夜明け前」（66分）を上映。その後、東京都福祉保健局で感染症危機管理担当部長という役職を務めていた月川由紀子さんがレクチャーを行いました。新型コロナウイルス感染症という未知の「敵」に直面している人類の問題、これに立ち向かう私たちの考え方、感染防止という日常生活の課題について、一緒に考える貴重な時間となりました。特に、人類の登場以前から存在する細菌やウイルスが進化の過程で、次の生命体になっていったこと、人間が登場し集団で生活し、家畜を飼うという状態の中で感染症が広がり、大きな脅威になっていたこと等々、長い地球の進化のプロセスを視野に入れての問題提起はとても興味深いものでした。この日は講演に注目が集まり、十数名の来場者があり、熱心にメモを取りながらの様子が特徴的でした。

6日の日曜日、昼からの御茶ノ水のギャラリーで台湾記録映画の2本立てが行われると共に、午後3時か



らは、高島平の区民施設を第2会場とした上映会が同じ2作品で開催されました。上映の合間に、数多くの障害問題を描いた秀作が紹介され、それらの映画が障害福祉の理解に役立っていること、今回の2本の作品も台湾の障害者映画祭との交流で入手し、相互の作品交換で海を越えた交流が発展していることが今回の企画者である中橋真紀人プロデューサーより紹介されました。



月曜日を休館として、8日(火)には、ハンセン病の療養所で生きた女性詩人の心打つ姿を描いた記録映画「風の舞」(59分)を上映。差別と偏見に抗して、辛い心情を崇高な表現で訴えた人間像は深い感銘を与えました。その後には、東日本大震災での障害者の被災の実情を伝え、災害に備える方策を考える記録映画「生命のことづけ」(64分)を上映し、今も各地で起きる災害への対策の重要性を考えました。



9日(水)の1本目は記録映画「夜明け前」で、その後、この作品の中橋プロデューサーが製作の経緯と裏話を披露し、この作品の現代的な意義をアピールしました。その次に、劇映画「ふるさとをください」(94分)を上映し、この作品のモデルとなった「麦の郷」の田中秀樹さん(社会福祉法人「一麦会」の代表)が、精神障害者の抱える地域の生活での難しさと共に、現在の活動の状況、特にコロナ禍での大変さを報告してくれました。

最終日の10日(木)は国際人権Day、これに合わせて記録映画の「こんばんは」(92分)と「ハンセン病に生きる 弐雄二」(43分)を上映。前作は就学時に通えなかった人々が夜間中学で学びながら青春を取り戻す姿を描き、共感と感動を広げました。後の作品では、ハンセン病ゆえに驚くべき迫害を受けた人々の社会的な闘争の中心に立った弐雄二さんの証言と生き様を通じて、人権と何か、偏見と差別を生み出す社会の問題点を厳しく告発していて、鑑賞者に強烈な印象を残しました。

今回の上映イベントには、障害や福祉の関心を持つ市民、この分野に関わる人々が、東京近郊から多数、来場されると同時に、会場近くの地元で暮らす方々が参加され「身近で秀作を見る貴重な機会」と好評を得ました。上映と講演のプログラムの後には、講師を囲んで質問したり、感想を語り合う様子も見られました。

主催者からは、障害や福祉、人権を描く秀作が数多くあり、こうした作品を地域や学校などで活用する機会を増えるような取り組みへの期待がアピールされました。

会場では、日本の精神医療と「私宅監置」についてのパネル展示(提供:橋本明愛知県立大学教授)が期間中に行われました。また、障害を描いた近年の映画のチラシが数十点も掲示され注目されました。加えて、感染症問題に関する数点の著作が展示され、関心を集めていました。



ギャラリーの展示↑



高島平の展示 ↓



テーマの映画チラシの
← 展示の説明

